

泌尿器外傷は “忘れたころに” やってくる 「そなえよつねに」

企画にあたって

「そなえよつねに」というのは、筆者が中学生のころに活動していたボーイスカウトの標語です。登山やキャンプなど野外活動で遭遇するさまざまなサバイバルの知識を、普段から勉強して「備えておく」ことの重要性を強調していました。これは筆者が医師になったモチベーションにもつながった、生活の知恵の標語です。

泌尿器外傷は、泌尿器科医にとっては、あまり日常診療ではありません。泌尿器科臓器は比較的体の内側に秘められており、その外傷症例は、比較的「忘れたころに」やってきます。泌尿器科医の働き方はさまざまで、都市の三次救急施設、地方の県全体から症例が集まる県庁所在地の中核施設、都市近郊の市民病院、個人私立病院、開業医、それぞれの勤務形態に特徴的な泌尿器外傷が、それぞれの医師の専門分野にかかわらず、「忘れたころに」やってきて、救急隊や救急室医師から、あるいは後輩医師から連絡が入ります。またさらに、他科手術に際しての医原性の泌尿器外傷についても、術中から突然連絡があり、その場で即時の正確な対処が求められます。

現代は Artificial Intelligence (AI) が発達してきており、情報を受けた外傷疾患についての概要を「忘れて」いても、手元のスマホで2~3分スクロールすると、ChatGPT や Google Gemini などが、大概のことは教えてくれます。しかし、われわれはその情報を鵜呑みにはできません。専門家として、必ず信頼できる筋の最新のエビデンスに基づいた論説に論拠して、AI が提示した情報を泌尿器科医自ら検証し吟味する必要があります。そして内容の正確さに確信をもって、さらにそこに自らの経験を加味し、それぞれの置かれた立場でできる最善の判断を、患者さんに還元し行動する責任があります。

この特集は「忘れたころに」やってくる、その時にその瞬間に AI で得た情報を、ガイドラインとは少し違った角度で、①手元にある冊子で簡便に検証できること、②専門医の視点から一番知りたい要点が容易に把握できること、③日本の状況を踏まえて日本語で本邦の泌尿器科医の皆様へ届けること、④将来的には本特集が泌尿器科外傷診療の場での AI 活用のために有益な情報となるように、そのような意図をもって「常に備えるために」編集しました。

本特集が本邦の泌尿器科医の皆様への備えになれば幸いです。

国際医療福祉大学成田病院 腎泌尿器外科
井上 高光